

提言

若手アカデミー設置について



平成23年（2011年）9月28日

日本学術会議

若手アカデミー委員会 若手アカデミー活動検討分科会

この提言は、日本学術会議若手アカデミー委員会若手アカデミー活動検討分科会が検討の結果を取りまとめ、若手アカデミー委員会の審議と承認を経たものである。

日本学術会議若手アカデミー委員会若手アカデミー活動検討分科会

委員長	駒井 章治	(特任連携会員)	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科・准教授
副委員長	中村 征樹	(特任連携会員)	大阪大学大学教育実践センター・准教授
幹事	狩野 光伸	(特任連携会員)	東京大学大学院医学研究科・講師
幹事	関口 仁子	(特任連携会員)	東北大学大学院理学研究科・准教授
	井藤 彰	(特任連携会員)	九州大学大学院工学研究院・准教授
	隠岐 さや香	(特任連携会員)	広島大学大学院総合科学研究科・准教授
	川畑 秀明	(特任連携会員)	慶應義塾大学文学部心理学研究室・准教授
	北垣 浩志	(特任連携会員)	佐賀大学農学部・准教授
	久保 啓太郎	(特任連携会員)	東京大学大学院総合文化研究科・准教授
	塩尻 かおり	(特任連携会員)	京都大学次世代研究者育成センター「白眉プロジェクト」・特定助教
	住井 英二郎	(特任連携会員)	東北大学大学院情報科学研究科・准教授
	高橋 良和	(特任連携会員)	京都大学防災研究所・准教授
	竹村 仁美	(特任連携会員)	九州国際大学法学部・准教授
	田中 由浩	(特任連携会員)	名古屋工業大学大学院工学研究科・助教
	塚原 東吾	(特任連携会員)	神戸大学大学院国際文化科学研究科・教授
	野村 康	(特任連携会員)	名古屋大学環境学研究科・准教授
	西山 雄二	(特任連携会員)	首都大学東京人文科学研究科・准教授
	柳田 素子	(特任連携会員)	京都大学次世代研究者育成センター「白眉プロジェクト」・特定准教授
	横山 広美	(特任連携会員)	東京大学大学院理学系研究科・准教授

日本学術会議若手アカデミー委員会

委員長	唐木 英明	(第二部会員)	東京大学・名誉教授
副委員長	広渡 清吾	(第一部会員)	専修大学法学部・教授
幹事	武市 正人	(第三部会員)	大学評価・学位授与機構 教授
	浅島 誠	(第二部会員)	産業技術総合研究所フェロー (兼) 幹細胞工学研究センター長
	岩澤 康裕	(第三部会員)	電気通信大学燃料電池イノベーション研究センター長・特任教授
	大垣 眞一郎	(第三部会員)	国立環境研究所・理事長
	秋山 弘子	(第一部会員)	東京大学高齢社会総合研究機構 特任教授
	小林 良彰	(第一部会員)	慶應義塾大学法学部・教授
			同大学多文化市民意識研究センター長
	駒井 章治	(特任連携会員)	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科・准教授
	竹村 仁美	(特任連携会員)	九州国際大学法学部・准教授
	田中 由浩	(特任連携会員)	名古屋工業大学大学院工学研究科・助教
	塚原 東吾	(特任連携会員)	神戸大学大学院国際文化学研究科・教授
	中村 征樹	(特任連携会員)	大阪大学大学教育実践センター・准教授

要 旨

1 作成の背景

近年のグローバル化の進展、地球環境問題の深刻化、経済・産業構造の変化などにより、社会は対応すべき多くの課題に直面しており、これらの解決に向けた学術的な取り組みが必要とされている。このような課題の解決のためには、専門分野の枠を越えて多様な見識を持って俯瞰的に見通し、広範な問題に対して迅速かつ的確に対応できるアカデミー活動が枢要である。

日本学術会議はわが国の科学者コミュニティを代表する組織として、これらの問題に対して率先して取り組んできた。しかし、さらなるアカデミー活動の展開のためには、自由で柔軟な発想を持ち、未来への責任を主体的に引き受ける若手科学者を活用するとともに、次世代を担う科学者を育成することが急務である。

世界的に見ても、若手科学者の担う役割への期待は高まっており、若手科学者が独自のアカデミー活動を展開するようになってきている。ドイツ、オランダ等においては、2000年頃に若手アカデミーが設立された。また、2010年には各国の構成員(2011年には58ヶ国124名)からなる国際若手アカデミー-Global Young Academyが設立され、若手アカデミー活動検討分科会の委員も参加して、国際的な活動を行っている。日本学術会議でも、若手科学者がこのような国際的連携を深めるための窓口を設ける必要がある。

本提言は、以上の背景の下に、日本の科学者コミュニティにおける若手科学者の独自の位置と役割にふさわしい活動の形態と組織のあり方を検討し、とりまとめたものである。

2 現状及び問題点

学問の各分野で自らの知見を深め、学术界に入り独自の視点で研究を展開しようとする若手科学者は、大学においては自らの責任と裁量において教育研究に携わり始める立場にあり、産業界においては研究開発で中心的な役割を担い始める立場にある。若手科学者として捉えられる年齢層は分野によって異なるが、おおよそ30～45歳が中心であるといえる。このような若手科学者は、他分野の科学者との交流を深め、さまざまな分野の知見に接することによって、自由かつ柔軟な発想に至り、社会の直面する問題の解決や学術の発展に寄与することが期待できる。

しかしながら、現在の日本学術会議は、アカデミー活動において若手科学者を十分に活用できていない。現状では、日本学術会議の会員・連携会員は、それぞれの学問分野を主導してきたメリットベースによって選考され、主として50～60歳代から構成されている。現在の会員・連携会員による活動に若手科学者による自律的な活動が加われば、日本学術会議は、新たな視点を得てさまざまな問題の解決に寄与できるとともに、それを通じて新たな学術を切り開くことができる。また、このようなアカデミー活動に取り組む若手科学者には、次世代の学術を担う人材としての飛躍が期待できる。

日本学術会議にこのような新たな展開を導くためには、若手科学者が現在の会員・連携会員による活動に参加するというのでは十分でない。若手科学者が独自の視点を持って現

行の会員・連携会員による活動を刺激し高めることができるよう、若手の活動は自律的でなくてはならない。これによって、若手科学者による発想を日本学術会議のアカデミー活動に十全に活かすことが可能となる。

日本学術会議は、このようにして新しい力を生み出す若手科学者のアカデミー活動を活かし、同時に次世代を担う科学者を育成することのできる組織としての「若手アカデミー」を必要としている。

3 提言等の内容

日本学術会議は、社会が直面する課題の解決に向けて、また、学術の次世代を担う主体の形成と発展のために若手アカデミーを設置して、若手科学者の独自の組織と活動を位置づけ、これを支援する。

(1) 若手アカデミーの活動

若手アカデミーの活動は、社会に対する活動と、学術界に対する活動に分類される。

社会に対する活動とは、若手科学者の視点を活かした提言活動、産業界、行政、NPOとの連携、科学教育の推進、Global Young Academy の活動への参画等である。

学術界に対する活動とは、主に若手科学者の意見収集と、それを踏まえた当事者の立場からの問題提起、学協会等の若手科学者団体や異なった諸分野の若手科学者間の交流とその機会の提供、各国若手アカデミーとの連携などである。

(2) 若手アカデミーの組織

日本学術会議は、若手アカデミーの意義を尊重し、その活動を持続可能なものにするために、継続性および独自性という観点から、若手アカデミーを以下のように段階的に組織する。

当面、第 22 期においては、若手アカデミー委員会を幹事会附置委員会として設置し、原則として本提案を準備した若手アカデミー活動検討分科会メンバーを特任連携会員による構成員とし、若手科学者に該当する連携会員とともに、若手アカデミー設置に向けて準備活動を行う。

若手アカデミーは、第 23 期に、各部 20 名程度、合計 60 名程度の連携会員によって構成する。日本学術会議の組織としての若手アカデミーの位置づけ、および若手アカデミーを構成する若手科学者を連携会員として選考する制度は、第 22 期中に整備する。

(3) 若手アカデミー設置による効果

日本学術会議は、若手アカデミーを通じて、国際的活動や他分野交流によって俯瞰的視野を持つ若手研究者を育成するとともに、そのような若手科学者の新たな発想により、社会の諸問題の解決に積極的に取り組む独自の活動を展開できるようになる。こうして、若手アカデミーは日本学術会議の活性化に資するとともに、今後の機能強化に貢献することになる。

目 次

1	本報告に至るまでの経緯	1
2	若手アカデミー設置の意義	2
(1)	現状及び問題点	2
(2)	若手アカデミー設置の効果	3
3	日本学術会議と若手アカデミー	3
(1)	若手科学者のアカデミー活動	3
(2)	若手アカデミーの自律性	4
(3)	若手アカデミーの若手科学者	5
4	若手アカデミーの活動	6
(1)	社会に対する活動	6
(2)	学術界に対する活動	8
5	若手アカデミーの組織	10
(1)	若手アカデミーの位置づけ	10
(2)	若手アカデミーの構成員	10
(3)	若手アカデミー構成員の選考	11
6	結語	11

<参考資料>

1	若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会審議経過	13
2	若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会の活動状況 (国際活動、シンポジウム、執筆、震災対応、新聞掲載実績等)	15
3	Global Young Academy による声明 (2011年3月22日)	17
4	Global Young Academy に関する報道実績	18
5	東日本大震災に対する分科会活動に関する報道	23

1 本報告に至るまでの経緯

今日の社会は、政治、経済、社会のあらゆる面において転換期を迎え、学術はさまざまな課題に直面している。この中で、学術に携わる者が年齢や世代、性別、分野を超えた経験や視点をアカデミー活動に取り入れることが求められている。

日本学術会議のアカデミー活動では、もちろんのこと、多様な意見の反映に努めているが、必ずしも十分であるとはいえない。アカデミー活動における多様性への対応の重要な観点の一つとして、学問の各分野で自らの知見を深め、学術界に入って独自の視点で研究を展開しようとする「若手科学者」の意見を反映させるということがある。学術界における経験年数によって若手層を捉えることもあろうが、総じて若手科学者として捉えられる年齢層は30～45歳が中心であり、現在の、主として50～60歳代によって構成される会員・連携会員を補完する層であるといえる。日本学術会議では、このような若手科学者の意見を十分に反映させてきたとはいえない。

このような状況を改善するために、日本学術会議は、若手科学者の活動を新たな視点として活用するとともに、若手科学者の知見を十分に反映させる仕組みの整備を急ぐ必要がある。2010年4月に公表した『日本の展望—学術からの提言2010』やその他の提言において若手研究者を取り巻く問題が取り上げられているが、これらの若手研究者に関わる問題の解決に当事者である若手が関与するというのが、若手科学者の活動の一例である。

若手科学者を活用し、若手の意見を反映させる仕組みを確立させた事例は、ドイツやオランダ等に見られる。これらの国々では、世界に先駆けて従来のアカデミーとは独立した「若手アカデミー」を設立して活発に活動しており、その活動は各国で高い注目を集め、科学を志す若い世代の大きな関心の対象ともなっている。また、これらの各国若手アカデミーを核として、2010年2月には、世界経済フォーラムとInterAcademy Panelとの支援の下に、Global Young Academyが設立され、若手アカデミーの組織化が進んでいる。その活動はNature誌、Science誌でニュースとして取り上げられる(参考資料4 Global Young Academyに関する報道実績)など、国際的にも注目されている¹。

このような国内外の動向を踏まえ、日本学術会議は、我が国における「若手アカデミー」のあり方を審議するため、2009年6月に若手アカデミー委員会を設置した。同委員会の下、2010年5月には、より具体的な計画案を検討するために、若手科学者からなる若手アカデミー活動検討分科会を設置した。以下は、若手アカデミー委員会若手アカデミー活動検討分科会において検討し、取りまとめた若手アカデミーの設置の提案であり、若手アカデミ

¹ 本活動検討分科会委員もGlobal Young Academyに参加し、Executive Committeeメンバーに選出された。2011年3月の会合では、東日本大震災に対する内容を含んだ声明(参考資料3 Global Young Academyによる声明(2011年3月22日))が採択された。

一設置の意義と理由、活動内容、及びその組織のあり方を示すものである。

2 若手アカデミー設置の意義

(1) 現状及び問題点

今日の日本社会は大きな転換期を迎え、グローバル化の進展の下、国、組織、分野、ジェンダー、世代、情報など、あらゆる既存概念の再編が必要とされる時代が到来しつつある。また、世界的には、環境、食糧、人口、災害、事故など、地球規模の課題に直面しており、その深刻さは増すばかりである。産業・経済構造も急激に変化しており、我が国においては、生産拠点の海外移転や大企業の国際的再編が進み、終身雇用制を始めとする経営手法にも変化が生じ、国内雇用情勢の悪化や収入格差の拡大などの問題が顕在化している。いずれの問題も、背景の変化に起因していることから、過去の成功例をあてはめて解決できる状況にはない。これらは、学術だけでは解決できないが、学術なくしては見通しがつかない問題であり、学術に携わる者には等しく課題解決に向けた努力を求められている。学術の成果に基づく社会への助言・提言を行う「社会のための学術」としてのアカデミー活動の意義はここにある。

一方で、我が国の若手の科学者コミュニティの状況にも目を向ける必要がある。近年、我が国においては、若手層における学術への興味関心の低下が見られる。学術界への競争的環境の導入と流動性の低い社会制度との齟齬によって、失敗が失職の危険をもたらすという状況を生み、若手科学者のキャリアトラックが見えにくいこともその一因であろう。また、若手科学者を中心とした男女共同参画の推進のためのワークライフバランスの見通しがつかないことも不安を生んでいる。このような現状は、若手科学者がその役割を果たすために能力を発揮することを妨げ、学術界に魅力を見出しにくい原因となっているといえる。加えて、科学者コミュニティでは、若手科学者を「若手は自らの研究のために活動すべきである」という個人主義的な価値観の中に置くことが多く、こうした活動と並行して社会のためにも活動しようとする人材が埋もれている面もある。このような若手科学者を取り巻く環境に対して、当事者である若手科学者が意見を表明し、課題解決のために提言することは、広く学術界にとっても重要なことである。

折しも、2011年3月に起こった東日本大震災は、社会への貢献の重要性を再認識させ、若手科学者にもその責任と社会における活動への内的欲求を確認させるきっかけとなった。社会において、科学者も個人主義の追求に汲々とすることは許されず、自らを高

める活動と自らにできる社会的な活動とを両輪として、若手の頃から活動すべきである。しかし、これまで、若手科学者の「学術のための学術」と「社会のための学術」の活動の場が十全に用意されてきたとはいえない。

このような状況に鑑み、日本学術会議では、第 21 期に若手科学者のアカデミー活動のあり方の検討を始め、1 年半にわたって討議を重ねてきた。

(2) 若手アカデミー設置の効果

若手アカデミーの設置は、年齢や世代、性別、分野を超えた多様な経験や視点を、学術からの政策提言の中に取り入れる仕組みの一つになる。若手アカデミーによって、科学者コミュニティの重要な一角を占める若手科学者の組織と活動が明確に位置づけられ、一定の代表制を確保することができる。いいかえれば、若手アカデミーは、アカデミー活動に積極的に関わる若手科学者による集団を創出しようとするものである。

若手アカデミーにおける活動は、若手科学者が、細分化された研究分野の「蝸壺」から脱し、他分野の若手科学者と積極的に交流・連携する機会を創り出す。この中で、若手科学者は、現代社会の直面する問題の解決に貢献するとともに、今後の学術界を担う人材が育成される。実際、若手アカデミー活動検討分科会の活動を開始して以来、各委員は互いの専門性に啓発され、結果として日常の研究活動が以前より活発化している。若手科学者は、アカデミー活動を通じて自らの学問領域の深淵を探ると同時に柔軟な発想力を発揮し、学問の融合や新たな学問領域を創出して、学術や社会に貢献することができる。このような若手科学者の活動は、科学の道を志すさらに若い世代の関心を刺激するものと期待できる。

3 日本学術会議と若手アカデミー

(1) 若手科学者のアカデミー活動

① 日本学術会議における若手科学者

現在の日本学術会議は、若手科学者を十分に活用できているとはいえない。日本学術会議の会員・連携会員は、メリットベースによって選考されるので、すでに自らが主導してきた分野における学術的業績をあげた 50 歳代以上が 92.3%を占めている。実際、大学においては 45 歳未満の教員が 40.7%であり、日本学術会議の構成員の年齢分布が大学教員のそれと大きく異なっていることから、アカデミー活動における若手

科学者の代表性が欠けているといえる。

日本学術会議では、科学者コミュニティの世代的広がりを反映していない現在の会員・連携会員の年齢構成からみれば、若手アカデミーを設置して若手科学者の知見を活かすことにより、アカデミー活動をいっそう高めることができる。

② 俯瞰的視野をもつ若手科学者の育成

研究分野の細分化とともに、若手科学者は往々にして、個々の専門分野の枠組みの中でのみ活動しがちである。若手科学者が自らの専門分野の蝸壺から脱し、分野ごとの学協会単位にとどまらず、多様な研究、思想、人材に触れ、学識を深めることは、自らの研究活動をさらに洗練させることになる。加えて、若手科学者による協働は異なる研究領域を相互に刺激し、学術の発展に寄与するものと期待できる。さまざまな研究領域に潜む共通の課題を認識することが新たな研究の種になり、社会からの要請に応えるためにも、こうした学際的な研究が必要とされる。

日本学術会議では、人文・社会科学、生命科学、及び理学・工学のあらゆる学術分野の若手科学者を構成員とする若手アカデミーによって、俯瞰的視野を身につけた次世代の学術の担い手を育成することができる。

③ 若手科学者の代表性

日本学術会議に若手アカデミーを設置し、若手科学者の代表を構成員とすることにより、機能強化を図ることができる。

若手アカデミーは、独自の視点から意見を発信して日本学術会議の活動の第二の力となり、若手の科学者コミュニティを代表して、社会問題や科学・技術政策に関する議論を促進させる。若手アカデミーの構成員には、子育て世代が入ることからも、男女共同参画への観点など、これまでは見逃されてきた学術界における新しい課題や解決への取組みも期待できる。

(2) 若手アカデミーの自律性

若手アカデミーの役割の一つは、次世代を担う若手科学者自身が描く未来に向けて提言し、それを自らの手で実現してゆくことである。若手科学者の独自性のある活動のためには、若手アカデミーの自律性が重要である。ドイツとオランダでは、2000年頃に、限定的であったアカデミーにおける若手科学者の影響力に鑑み、若手科学者の能力を発揮させるために、既存のアカデミーに若手科学者を加えるのではなく、自律させた形の若手アカデミーを設立した。

各国の事情や背景があるにしても、我が国において若手アカデミーの理念を実現する

にあたっては、日本学術会議の中の一つの組織として設置するのが効果的である。若手アカデミーの活動によって、日本学術会議全体の活動が強化されると期待できるからである。日本学術会議における組織面の検討が必要なことはもちろんであるが、若手アカデミーが独自に運営できるように配慮する必要がある。

(3) 若手アカデミーの若手科学者

日本学術会議の若手アカデミーは、現行の会員・連携会員によるアカデミー活動を補完する独自の活動を行うに相応しい構成員とする必要がある。

学問の各分野で自らの知見を深め、学术界に入り独自の視点で研究を展開しようとする若手科学者は、大学においては自らの責任と裁量において教育研究に携わり始める立場にあり、産業界においては研究開発で中心的な役割を担い始める立場にある。若手科学者として捉えられる年齢層は分野によって異なるが、おおよそ 30～45 歳が中心であるといえる。

以下のような考察から、若手アカデミーの構成員は、この 30～45 歳という年齢を基準とし、博士の学位を取得後 10 年、あるいは分野によっては博士課程退学後の 10 年という研究歴の早期段階にある若手科学者からなるものとする。

① 若手科学者の位置づけ

学術的な知見を深め、一定の目標達成が一段落し、自らが主体的に学術のあり方に取り組み始める立場にある若手科学者は、自らの研究だけでなく、社会的な次元にも視野を広げる時期である。このような若手科学者が、個人主義的な意味での研究従事者としての自覚に留まらず、研究を成立させ支持している社会や、未来の世代に対する責任について認識を深めることは、若手アカデミーの活動にとって極めて重要なことである。

こうした活動が一時的に若手研究者個々人の研究活動の歩みを緩めさせるものであったとしても、長期的な視点からすれば、研究の最先端への理解と学術的基盤の強化、さらには社会的視野を兼ね備えた人材の輩出へとつながるといえる。実際、若手アカデミー活動検討分科会の委員は、自らの研究活動に対する意欲が一層大きくなっていると感じている。

② 若手科学者の国際的活動

現代社会は、環境、食糧、人口、災害、事故など、地球規模の重要課題に直面している。これらの課題の解決に向けては、グローバルな視点から策を見出す必要がある。

ドイツやオランダでは、従来のアカデミーとは独立した若手アカデミーが設立され

です。すでに 10 年余にわたって活動している。また、国際若手アカデミー Global Young Academy も設立されて活動を開始している。日本学術会議に設置する若手アカデミーでは、これらの若手アカデミーと連携して国際的な若手科学者コミュニティの発展を目指すために、各国の若手アカデミーの構成員と同世代の若手科学者による活動を支援するのが適当である。

4 若手アカデミーの活動

若手アカデミーは、社会に対する活動と若手科学者に対する活動とを行う。具体的な活動内容は以下の通りである。その活動のプロセスや成果については社会への透明性を確保し、若手アカデミーの外からも多様な意見を取り込み、広く公表することによって活動を発展させる。近年、発達の著しい Web 技術などを活用し、ネット会議やウェブページを介した意見交換などによる柔軟で効果的な討議を試みる。

(1) 社会に対する活動

社会に対する活動として、若手科学者の視点を活かした提言活動、産業界や行政、NPO などとの交流、科学教育の推進、及び Global Young Academy の活動を通じたグローバルな課題解決への貢献を行う。

① 若手科学者の視点を活かした提言活動

社会が直面する諸問題の解決に若手科学者の成果を役立てるために、若手研究者が分野を超えて連携し、共同して問題解決に取り組むことのできるシステムを構築するとともに、社会とのインターフェースを積極的に模索する。学協会の若手科学者組織と共同し、科学者コミュニティ全体に活動を広げるとともに、産業界、行政、メディア、教育界や各国若手アカデミーとの交流を深めて、国内外を問わず同世代との連携を図ることにより、若手科学者の視点を生かした提言活動を行う。また、環境やエネルギー、財政など、今後の社会に影響を与える諸問題に対して、責任を担う若手科学者として積極的に関わり、学術の立場から解決策を提示する。

若手科学者が直面する問題については、その当事者である若手科学者自身が独自に検討し、実効的な解決を見出すべきである。例えば、日本学術会議により提出されている「日本の展望—学術からの提言 2010」を自ら未来を担う若手としての視点からレビューし、若手からの「日本の展望」を提示する。また、若手科学者が直面するキャリアトラック問題への対応も考えられる。近年の競争的環境の急激な導入と、日本の社会制度との齟齬による問題が生じている。大学教員の任期付雇用の増加は、人材流動性の高くな

い社会制度との乖離によって、深刻な問題を生じている。若手科学者は、渦中にある当事者として、解決に向けて検討すべきである。

科学者コミュニティにおける男女共同参画の課題も重要であり、共働き環境を前提とした新たなワークライフバランスを確立することも、とくに若手層に深く関わっている。男女共同参画社会基本法が制定されて以来 10 年以上が経過し、学術界でも女性科学者の数は徐々に増えているものの、いまだ十分な状況とは言えない。就職・結婚・子育てなどをめぐって、女性に物理的・精神的な負荷がかかり、研究や仕事に専念できない状況がある。男女共同参画を、女性科学者だけでなく、男性科学者も含めた科学者コミュニティ全体の問題として位置付け、家事・育児等を含めた家庭での生活と研究活動とを両立させるシステムを構築することが必要である。とりわけ共働きが一般化してきた若手世代においては、人事異動や業転等により、夫婦で勤務地が異なる場合の子育て支援体制の欠落など、これまでには顕在化しなかった問題が増加してきている。また、過去には夫婦間で家庭と職場を分業することにより可能になっていた研究室における長時間勤務も、いまでは現実的に不可能となるケースが増え、世代間で価値観の相克が生じてきている。

こうした課題や問題については、年齢的にも環境的にも当事者に近い立場にある若手アカデミーが効果的な提言を行うことができる。若手アカデミーは、若手科学者の現状を把握し、根本的な課題や問題を調査・分析して対外的な提言活動を行う。

② 産業界、行政、NPO などとの交流

研究成果を社会的問題の解決に役立てる場合、多様な考え方や利害関係者の存在を視野に入れることが重要である。若手アカデミーは産業界や行政、NPO などとの交流を通じて多様な立場と考え方を理解し、連携して問題の解決に貢献する。研究活動以外の各分野において、若手科学者と同世代の人材は、それぞれの分野において中心的な役割を果たしていることが多い。こうした人材との交流は、実効のある相互の関係の構築を可能にする。若手アカデミーは、各界同世代の人材と若手科学者の交流を積極的に進めるとともに、出版社やメディアの人材との交流を図ることで、より正確で効果的な情報発信を行う。

高い研究能力と経験を持った人材が、大学・研究機関のみならず、産業界や行政、NPO など社会の各分野で活躍することは、知識基盤社会において極めて重要である。多様な分野で活躍する人材を輩出するためには、社会で活躍したいという志を抱く若手科学者と、そのような人材を必要とする人々を媒介する場が必要である。若手アカデミーは、異分野科学者の交流やキーパーソン同士の連携を促進して、より広範な求人情報を効果

的に流通させ、若手科学者が自分にふさわしい活路を見つけるための実効的な支援を行う。

③ 科学教育の推進

次世代のための学術的基盤を強化するために、研究活動の持つ魅力を社会、とりわけ、より若い世代に対して発信し、学術研究の持続的な発展に貢献することが必要である。

近年、我が国では、若年層において、学術に対する興味関心の低下がみられる。その理由は様々であるが、学術に対する関心の低下は進路決定前の若者が科学技術の世界へ進もうとする気持ちを阻害し、ひいては科学・技術分野への人材供給不足をもたらす。この状況に対する一つの打開策は、近い世代である若手研究者が、魅力的なロールモデルとなることである。教育の現場が示しているのは、楽しく活動している科学者のもとには、元気のよい若者が多く集まるという普遍的な事実である。これを若手科学者が実現すれば、学術を志す人材が増加するといえる。

若手アカデミーは、科学教育を推進し、次世代を担うより若い世代に刺激を与える役割を果たす。

④ Global Young Academy の活動への参画

地球環境問題、資源・エネルギー問題、人口問題などいわゆるグローバルな課題は、世界の科学者コミュニティの共通の課題である。若手科学者も国際的な連携を通じて、課題解決に向けて積極的に貢献することができる。若手アカデミー活動検討分科会においてもこの点を重視して活動を始めている。

東日本大震災後の研究者受け入れに関わる国内外の情報の一元化と、日本学術会議ホームページを通じた情報発信を行ったことが一例である（参考資料5 東日本大震災に対する分科会活動に関する報道）。その際、国内受け入れ研究室情報の収集だけでなく、Global Young Academy を通じて世界規模の受け入れに関する協力を得ることができた¹。このような世界規模での若手アカデミーの連携は、非常に有意義であり、これらの活動を通して、世界の「動き」を科学的な視点から捉え直すことが可能となる。

(2) 学術界に対する活動

若手アカデミーは、メンバーだけの活動の場ではなく、広く若手科学者にとって開かれた場として構築し、学術界に対する活動として、主に若手科学者からの意見収集、異なった諸分野の若手研究者間の交流機会提供、各国若手アカデミーとの連携などを行う。

¹ 東日本大震災を始め中東・北アフリカの情勢を受け、世界規模の受け入れ体制に関して、Global Young Academy の statements として配信され、非常に多くの国から協力表明を得た。

① 若手科学者の意見収集

学協会を単位とした若手科学者組織は既に数多く存在しており、多くの提言が発表され、様々な活動がなされてきている。しかし、若手科学者の意見を集約し、社会や政策提案に関与するまでには至っていない。こうした現状を踏まえて、効果的な提言活動を行うため、若手科学者が分野横断的に連携し、意見を集約する機能を強化することが求められている。

このため、若手アカデミーは、学協会の若手科学者組織と共同し、意識の高い若手科学者が分野を超えて連携できるシステムを構築し、若手科学者の意見を集約する。また、若手科学者全体を取り巻く環境に対して自ら打開策を発信すると同時に、社会の問題解決や政策提言に対しても、若手科学者間の議論を促進し、若手科学者の観点からの自主的な学術活動を行う。

② 異分野の若手研究者の交流機会の提供

研究の高度な専門化は、新たな展望を開くための障壁にもなりうる。社会問題への貢献や既存の学術領域においてブレイクスルーを見いだすためには、異分野の科学者間で連携を活発にするとともに、多角的なアプローチや視点で各人の専門性をとらえ直すことが必要となる。この目的のために、若手アカデミーは学際的研究を支援し促進する。若手アカデミーは、学際的な議論・交流を行い、広く学際的研究の新しい場を提供する。同時に、学問分野を超えた議論や学術セクター以外との交流の中で生まれた成果とその魅力を積極的に発信し、とりわけ若手科学者に対して学際的研究への関心を促進する。新規の学際的研究は往々にして、その成果発表のための妥当な学術誌が見つかりにくいことも事実である。こうした隘路を克服するために、将来的には若手アカデミー独自の連携研究を主眼とした学術誌を発刊することも視野に入れる。

また、学協会の若手科学者組織との連携を図り、連携が可能なプラットフォームを提供する。それを実現するために、交流の場の設定や、Web で研究・人材ニーズやシーズの情報を提供する。これにより、分野横断的な情報や人材の流れを活発にし、新たな研究の創出や既存の研究結果に関する新たな知見が導出できる環境を整備する。また、学協会以外の自発的に活動している若手研究者グループを登録することで、その活動の実情を考慮した支援策を検討する。各グループの代表者をつなぐ場を提供し、交流や活動の機会を整備することにより、新たな連携の創出が可能となる

③ 各国若手アカデミーとの連携

若手アカデミーは、各国の若手アカデミーとの連携を行う中で、学術交流における国際感覚を養い、国際的にもリーダーシップを発揮できる人材の育成に貢献する。タ

イや中国、韓国、シンガポール、台湾などのアジア諸国・地域では、若手アカデミー設立を急ぐ動きがある。各国の事情により、設置に至る経緯は異なるものの、基本的な理念として、若手科学者の育成と連携を掲げている点については一致している。さらに多くのアジア諸国にとって、日本学術会議における若手アカデミーの設置は一つのモデルとなるであろう。若手アカデミーの活動が先行しているヨーロッパ諸国との連携のみならず、これらアジア諸国・地域の活動に対して助言し、各国若手アカデミーと連携することによって、若手科学者の国際的な学術交流を深める。とりわけアジア地域においては、アジアに固有の諸問題について若手科学者の観点から解決策を見いだす共同の作業も可能となる。

5 若手アカデミーの組織

日本学術会議に「若手アカデミー」を設置し、若手科学者による独自のアカデミー活動を行うために、日本学術会議は、次世代を担う若手科学者が未来に向けて提言し、自らの手でそれを実現していく土壌となるように組織する。

若手アカデミーの設置は、第23期における実現を目途とする。第22期においては幹事会附置委員会として、第21期の若手アカデミー活動検討分科会委員(特任連携会員)を主な委員とする「若手アカデミー委員会」を設置する。この委員会には、若手科学者に該当する連携会員の参加も促し、第21期の活動を継続して、提言活動や科学技術コミュニケーション活動を展開する等、多様なアカデミー活動を試行する。

以下には、第23期に設置する若手アカデミーの枠組みを示す。若手アカデミーの組織の位置づけ及び構成員の選考方法等について日本学術会議で早急に検討して制度の整備を図る。

(1) 若手アカデミーの位置づけ

日本学術会議における「若手アカデミー」は若手科学者によって構成される独自のアカデミー活動の主体である。若手アカデミーの運営の詳細や日本学術会議の総体との関係については、今後、検討が必要であるが、若手アカデミーの活動を日本学術会議の機能強化に活かすために、たとえば、その代表者が幹事会にオブザーバとして参加することが考えられる。

(2) 若手アカデミーの構成員

若手アカデミーは、若手科学者の集団として独自の活動力を確保しつつ、組織の流動性と持続性を考慮し、ドイツ、オランダなどの例を参考にして、各部 20 名程度、計 60 名程度によって構成する。

日本学術会議の会員の年齢層、及び諸外国の若手アカデミーのメンバーの年齢層を考慮し、若手アカデミーの構成員は 30～45 歳代であることを基準とする。ただし、年齢にかかわらず、国内外の博士(相当)の学位取得後 10 年以内の者、また、人文・社会科学系の研究者にあっては、博士課程単位取得満期退学から 10 年以内の者も含むものとする。

若手アカデミーは連携会員からなるものとし、その任期を 6 年とする。ただし、立ち上げ時においては、その半数を 3 年の任期とし、3 年ごとに半数の改選を行い、活動の継続性を確保する。

(3) 若手アカデミー構成員の選考

若手アカデミーの独自の活動力のために必要とされる一定数の若手の連携会員を選考するために、連携会員の選考にあたって、各部 20 名程度の「若手科学者枠」を設け、若手アカデミーの構成員にふさわしい連携会員を選考する。若手科学者枠の設定、および連携会員の選考にあたっては、候補者が優れた研究業績を有していることに加えて、若手アカデミー活動に対する意欲と取り組むべき課題に対する的確な理解を有することを考慮する。なお、若手科学者枠によらず選考された連携会員が若手アカデミーの構成員となることを妨げない。

連携会員の選考において若手科学者枠を設けることは、メリットベースによる会員・連携会員の選考基準を変更するものではない。

6 結語

若手アカデミーの設置は、次世代を担う若手科学者に日本学術会議の活動への参加を促し、学術と社会の問題について広い視野から検討する場と多様な交流の機会を提供し、若手科学者が学術における将来の担い手として育つ土壌となる。他方で若手科学者の集団は、日本学術会議を活性化し、新しい力をもたらすであろう。これらを通じて、科学者コミュニティの代表機関としての日本学術会議の役割はうたがいなく強化される。

若手アカデミーは、若手科学者が分野と国境を超えて自由に、積極的に交流・連携する機会を創り出し、新たな学問領域の創出や統合的学問を目指すボーダレスな知的共同体の

一角を担う場ともなりうる。また、若手アカデミーは、若手科学者の視点を活かして、社会的な問題への対処法を模索する場でもありうる。

さらに、若手アカデミーの設置は、ジェンダー的観点からも意義が大きい。近年の若い世代の女性研究者の増加は、若手アカデミーがより自然な形で、より積極的に学術の場における男女共同参画を目指すことを基礎づけている。近年の大学運営形態の変化に伴い、若手科学者を取り巻く雇用形態や研究環境は、多様性を増し、かつ、困難な状況を生みだしている。若手アカデミーは、若手科学者が独自の活動とエネルギーに基づいて、科学者コミュニティの力を引き出し、自らの進路を切り開く可能性を与えるものといえる。

<参考資料 1>

若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会審議経過

平成21年

7月23日 若手アカデミー委員会（第1回）

- ・役員の選出
- ・若手アカデミーの在り方について
- ・今後の進め方について

11月26日 若手アカデミー委員会（第2回）

- ・若手アカデミーに関する国際ワークショップへの派遣について

平成22年

2月8日 若手アカデミー委員会（第3回）

- ・若手アカデミーに関する国際ワークショップについて
- ・シンポジウムの開催について

4月19日 若手アカデミー委員会 拡大役員会

- ・オランダにおけるヤング・アカデミー活動に関する報告
- ・NYA設立のためのブループリントについて

4月22日 若手アカデミー委員会（第4回）

- ・ドイツでの国際ワークショップ等の報告
- ・若手アカデミーの在り方について

6月29日 若手アカデミー活動検討分科会（第1回）

- ・役員の選出
- ・若手アカデミー活動の基本方針について
- ・サイエンスアゴラ 2010 でのシンポジウム企画について
- ・海外派遣（世界経済フォーラム、Global Young Academy 総会）について

9月8日 若手アカデミー委員会（第5回）

- ・若手アカデミー活動検討分科会委員の選考について

10月23日 若手アカデミー活動検討分科会（第2回）

ー24日

- ・若手アカデミー活動の基本方針について、
- ・提案書骨子案について

- 1 1月15日 若手アカデミー活動検討分科会 拡大役員会
 - ・提案書骨子案について
 - ・当面の活動、組織について
- 1 1月19日 若手アカデミー活動検討分科会（第3回）
 - ・提案書骨子案について
 - ・当面の活動、組織について
- 1 2月 9日 若手アカデミー委員会（第6回）若手アカデミー活動検討分科会（第4回）合同委員会
 - ・若手アカデミー設置提案について
 - ・今後の進め方について
- 1 2月17日 若手アカデミー活動検討分科会（第5回）
 - ・文部科学省科学技術政策研究所 茶山秀一上席研究官との意見交換

平成23年

- 2月 9日 若手アカデミー活動検討分科会（第6回）
 - ・総合科学技術会議 相澤益男議員との意見交換
- 2月21日 若手アカデミー活動検討分科会（第7回）
 - ・科学技術振興機構 北澤宏一理事長との意見交換
- 4月 1日 若手アカデミー活動検討分科会 役員会
 - ・若手アカデミー設置提案について
- 4月18日 若手アカデミー活動検討分科会（第8回）
 - ・日本学術振興会 小野元之理事長との意見交換
 - ・東日本大震災に関連するシンポジウムの企画について

上記のほか、若手アカデミー活動検討分科会では、出張時間の節約と、多くの人数の出席を得る試みとして、Skype™を用いたインターネット会議を開催してきた。その履歴は以下のとおり。

平成23年

- 1月26日 (出席者14名)
 - ・若手アカデミー設置提案について
- 3月 9日 (出席者12名)
 - ・若手アカデミー設置提案について
 - ・海外派遣（世界経済フォーラム）について
- 3月28日 (出席者11名)
 - ・2011 Global Young Academy 総会の出席報告

<参考資料2>

若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会の活動状況 (国際活動、シンポジウム、執筆、震災対応、新聞掲載実績等)

平成22年

2月14日－16日

若手アカデミーに関する国際ワークショップ（ベルリン）への参加

- ・若手アカデミー委員会委員4名を派遣
- ・グ Global Young Academy 設立に貢献

3月 4日

シンポジウム「若手アカデミーとは何か」（大阪）の開催

- ・欧州科学人文学会連合 ルーディガー・クライン事務局長の講演
- ・Global Young Academy、各国若手アカデミーの動向に関する報告
- ・若手アカデミーに関するパネルディスカッション

3月21日－23日

IAC 理事会及び IAC/IAP ジョイントミーティング（オランダ）への参加

- ・オランダヤングアカデミーに関する現地調査

8月－9月

「学術の動向」2010年8月号、9月号に Global Young Academy、各国若手アカデミーの動向に関する報告等を執筆し掲載

- ・「若手アカデミーの設立に向けて」
(8月号) <http://www.h4.dion.ne.jp/~jssf/text/doukousp/2010-08.html>
(9月号) <http://www.h4.dion.ne.jp/~jssf/text/doukousp/2010-09.html>

9月12日－16日

第3回 IAP 若手科学者会議2010（中国）への参加

- ・若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会委員2名を派遣
- ・産学連携に関する企業人を交えての意見交換
- ・世界経済フォーラムへの参加
- ・ヤングサイエンティストアンバサダープログラムの構想に貢献

11月20日

サイエンスアゴラ2010

シンポジウム「新しい科学技術政策と若手研究者の役割」を開催

<http://www.scienceagora.org/scienceagora/agora2010/program/show/A44>

- ・若手アカデミー設置に関する骨子案報告、パネルディスカッション

平成23年

3月20日－22日

Global Young Academy 第1回総会（ベルリン）への参加

- ・若手アカデミー委員会・若手アカデミー活動検討分科会委員（Global Young Academy 会員）4名を派遣
- ・東日本大震災やアフリカの状況に対する声明の作成
- ・駒井分科会委員長が executive committee に選出

4月 6日以降～

「被災された研究者・学生等の受入・研究支援等に関する情報」の発信等

- ・東日本大震災の発生を受け、被災された研究者・学生等の受入・研究支援等に関する情報を独自に収集し、日本学術会議のホームページを活用して発信中
<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/wakateacademy/index.html>

4月22日

「震災支援に関する情報掲載」に関して科学新聞に記事掲載

6月25日（予定）

シンポジウム「若手研究者の考える、震災後の未来— 学術に何ができるのか」
（日本学術会議講堂）を開催予定

<参考資料3>

Global Young Academy による声明 (2011年3月22日)

(東日本大震災への言及及び若手アカデミー活動検討分科会委員長駒井の名前を含む。)

<http://globalyoungacademy.org/index.php/new/192-press-release-from-the-gya-general-assembly-2011>

FOR IMMEDIATE RELEASE

Global Young Academy helps in the recovery from current global crises

The Global Young Academy (GYA) notes the extraordinary events unfolding across North Africa and the Middle East, and in Japan. We express our hopes for rapid improvements in these unique crises. As the voice of young scientists around the world, and supported by the world's national scientific academies, we are uniquely positioned to help researchers in affected areas. We will act immediately and decisively in the following ways.

First, we will coordinate visiting positions for young researchers, including students and more established scientists, at host institutions represented within the Global Young Academy. These actions will restore a measure of stability for researchers and students during this time of upheaval and provide opportunities for those affected to share their experiences.

Second, rapidly unfolding events in Japan and across North Africa and the Middle East have obscured critical scientific information that could help communities respond and recover. Using the diversity of research expertise within the Global Young Academy, we will identify key sources of reliable scientific information so researchers in affected communities can more effectively offer advice to citizens and their communities based on the best scientific evidence available.

Third, the Global Young Academy recognizes that revolutionary changes bring peril but also opportunity. To support colleagues and expand links with emerging democracies, we will hold our second General Assembly at the Library of Alexandria, Egypt in early 2012.

Science is integral to society. There is no doubt that Japan's outstanding preparation for an otherwise unpredictable event saved many lives. Looking ahead, we will continue to find ways to overcome each of these challenges. The Global Young Academy offers our scientific colleagues and their communities our full and lasting support.

-Unanimously supported by the General Assembly of the Global Young Academy

Greg Weiss, Professor at UC Irvine and GYA Co-Chair, adds: "The GYA extends its deepest sympathies to the Japanese people suffering through a triple disaster. We'd like to reach out directly to the affected young scientists by helping to link them to other young scientists who could offer them openings for sabbaticals abroad. Together, we can minimize the impact of this devastating tragedy on the delicate careers of young scientists."

Berlin, March 22, 2011

About us: Formed in 2010 with the encouragement of the world's scientific academies and the support of the IAP: global network of science academies, the Global Young Academy (GYA) provides a forum for early career scientists from more than 50 countries and every region. These research leaders are selected for membership competitively, and include young scientists around the age of 35 from all major scientific disciplines. The GYA seeks to address issues of practical importance to young scientists and to find constructive ways to integrate evidence-based approaches into topical debates in society. The GYA is oriented toward developing practical contributions as well as advancing scientific advice.

Contact persons:

Gregory Weiss (USA): gweiss@uci.edu, 001-949-824-5566

Bernard Slippers (South Africa): bernard.slippers@fabi.up.ac.za, 0027-83-6438560

Shoji Komai (Japan): skomai@bs.naist.jp or komai-ns@umin.ac.jp, +81 743 72 5418

T. Brück is head of the Department of International Economics at the German Institute for Economic Research (DIW Berlin), professor of Development Economics at Humboldt-University of Berlin, and Chair of the Board of Die Junge Akademie. E-mail: tbruock@diw.de

C. Beaudry is an associate professor of Innovation Economics at the École Polytechnique de Montréal in Canada, a member of the Center for Interuniversity Research on Science and Technology, and a researcher at the Center for Interuniversity Research and Analysis of Organizations. E-mail: catherine.beaudry@polymtl.ca

H. Hilgenkamp is a professor in Physics at the University of Twente, Enschede, and at Leiden University in the Netherlands and a member of the Young Academy of the Netherlands. E-mail: h.hilgenkamp@utwente.nl

N. Karoonuthaisiri is head of the Microarray Laboratory at the National Center for Genetic Engineering and Biotechnology, Thailand, and founding co-chair of the GYA. E-mail: nitsara.kar@biotec.or.th

H. Salah-Eldin Mohamed is an associate professor of Molecular Biology at the Institute of Endemic Diseases, University of Khartoum, Sudan, and a member of the Sudanese Academy of Young Scientists. E-mail: hibasalaf@iend.org

G. A. Weiss is a professor in the Departments of Chemistry, Molecular Biology, and Biochemistry at the University of California, Irvine, and founding co-chair of the GYA. E-mail: gweiss@uci.edu

Empowering Young Scientists

THE VANCOUVER OLYMPICS REVEAL STARK DIFFERENCES BETWEEN THE WORLDS OF SPORTS and science. In both, young people from around the world try to surpass all previous accomplishments in pursuit of world records or scientific discoveries. Selected entirely on merit, athletes receive honor just for participating in the games, spurring the next generation of young people in each nation to excel. And as star athletes age, they often support their sport in other ways, serving as advocates, mentors, or coaches. In contrast, in too many nations, the selection and promotion processes in science involve considerations other than merit. Senior scientists receive most of the resources available for scientific research, and young scientists rarely receive societal recognition for their work. This situation is growing worse as life expectancies and retirement ages increase, along with the average age for attaining scientific independence.* Perhaps as one consequence, science is typically not a top career choice. How many exceptional scientists around the world thereby go unrecognized, their talents allowed to wither away untapped? In an attempt to reverse such trends, a nascent “young national academies” movement has begun across the globe, and a new international group has recently been established to promote this cause.

A world that increasingly faces global challenges such as climate change, resource exploitation, and public health disparities must mobilize all of its talents, regardless of age, gender, or country of residence. In the interests of scientific and resource sustainability, such a world also should encourage the views and approaches of its best young scientists, who often tackle research problems in less conventional ways than do their older, more established peers.

More than 100 young scientists from 40 countries have now created an organization called the Global Young Academy (GYA) (www.globallyoungacademy.org), with the encouragement and support of senior scientists through the Inter-Academy Panel for International Issues (IAP).** The GYA will unite talented young scientists from around the world: those around the age of 35 who are nominated by senior scientists in their own nations as likely future leaders. Membership, capped at 200, will be highly competitive, involving international peer review of nominations from national academies and similar organizations. Membership is temporary (4 years), to prevent the organization from becoming an “old academy.”

This effort is modeled on the formation of national young academies, only a few of which have been established so far. Die Junge Akademie was the first, founded in Germany 10 years ago by the Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities and the Leopoldina. Similar academies have been established in the Netherlands by the Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences and in Sudan by the Sudan Academy of Sciences. They encourage and empower their members to engage in interdisciplinary research, communicate science to society, and provide advice on national science policies, especially those affecting young scientists. The GYA will help establish national young academies and provide a forum for young scientists in countries without such organizations.

Support for the GYA concept by the IAP and the World Economic Forum began in 2008 and led to the first planning meeting in February 2010 in Berlin, Germany. The GYA emphasizes bringing together young scientists from developed and developing countries to expand research capacity and exchange best practices in science policy and education. This effort aspires to advance communications between science and society and to build on the global spirit of the Olympics through productive and friendly international interactions.

— Tillman Brück, Catherine Beaudry, Hans Hilgenkamp,
Nitsara Karoonuthaisiri, Hiba Salah-Eldin Mohamed, Gregory A. Weiss



10.1126/science.3385745

*C. Holden, *Science* 319, 391 (2008). **The authors are founding members of the GYA.

Published online 1 March 2011 | Nature | doi:10.1038/news.2011.126

News: Q&A

Homecoming queen

Global Young Academy co-chair says the organization can help reintegrate western-educated scientists.

Nicola Jones

The Global Young Academy — a group of exceptional young scientists from more than 40 countries — celebrates its first anniversary at a meeting in Berlin on 20–22 March. *Nature* talks to one of its two founding co-chairs, 32-year-old chemical engineer Nitsara Karoonuthaisiri from Thailand, about empowering youth in the developing world and helping them to reintegrate into their own cultures after training abroad.

Why does the science community need a Global Young Academy?

We have a tradition of well-established scientists coming together. But I don't think there are many young academies anywhere. The pioneers are in Germany [the decade-old Die Junge Akademie] and in the Netherlands [De Jonge Akademie].

Young scientists, around 35 years old, are in their prime: their creativity hasn't been limited; they haven't been moulded into a certain form. They have a lot of energy and they think outside the box. Also, if you learn to collaborate when you're young, this becomes the culture you grow up with — which we hope will help at a time when so many problems are interdisciplinary.

How did it start?

Around 40 young people, including myself, were invited in 2008 to attend a World Economic Forum (WEF) meeting in China — that was the first time the Inter-Academy Panel and the WEF joined up to invite young people. Together we agreed we had power — well, not power, but energy — so we decided we should do something. We eventually founded the academy in 2010.

What does the academy do?

We have four working groups: science education, science and society, early career development, and interdisciplinary research for regional and global problems. One project we're working on is recording researchers giving undergraduate lectures on video and sending those out to developing countries, starting with Pakistan. We also try to encourage the establishment of national young academies throughout the world: we have helped to found a Nigerian Young Academy and a Thai Young Scientists Academy, and others are looking at doing this. We got a grant from the Volkswagen Foundation in Germany last month — more than €200,000 (US\$280,000) — which is a start-up fund for these activities.



Nitsara Karoonuthaisiri, co-chair of the Global Young Academy.

Mr. Wittichai Mhuangtong

You're also the founding head of the microarray laboratory at Thailand's National Center for Genetic Engineering and Biotechnology. Does the academy work take up much of your time?

Now, in this busy time leading up to the annual meeting, I spend 8–10 hours a day on my research and an extra 3–5 hours on academy stuff. It is a long day.

You pursued your university education in the United States, finishing with a PhD from Stanford University. Why did you decide to come back to Thailand?

I went to the United States because I won a very competitive national Thai scholarship, which supports the top 20 or so high school students to study abroad. But the obligation is to come back – if you don't come back, then you repay the government.

What was it like to come back?

It was a culture shock for me. I had spent 10 years, becoming an adult, elsewhere: I left when I was 16 and came back at 26. I was reluctant to come back, because the United States was my home. I had friends and some of my family there.

Even the language was hard. Of course I speak Thai fluently, but you never have to write anything in Thai in the United States. In formal language that was already difficult for me. And I'd learned all the technical terms in English. Your native tongue comes back quickly, but then you lose your English too.

How is doing research in Thailand different?

When I first came back, everything was slower. Some chemicals took 45 days to get here, when they come the next day in the United States. There you have so many grants and the scale is huge; you can do a lot of fundamental research. In Thailand, there's a limited number of grants with limited budgets, and you have to make it really applicable and relevant. My project now is on economically important black tiger shrimp. I was lucky, because my workplace has such good executives who care about the well-being of their staff. And I have seen rapid progress in Thailand in the past six years.

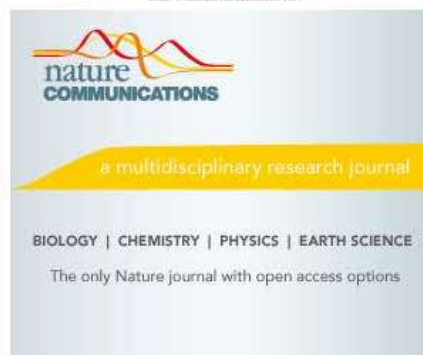
Is readjustment an issue that young academics can help with?

Oh yes. The developing countries really need this, because some young scientists there have a really good education from Britain or the United States, but when they return they face a lot of problems. They need to help each other out.

Plus, in many countries there is a barrier to young people speaking up or trying to change things. In the West, you take it for granted that young people can have a voice.

What is next for you?

ADVERTISEMENT



nature
COMMUNICATIONS

a multidisciplinary research journal

BIOLOGY | CHEMISTRY | PHYSICS | EARTH SCIENCE

The only Nature journal with open access options

I have been awarded a Marie Curie fellowship to work in the United Kingdom for the next two years, starting in August, at Queen's University in Belfast. I want to be the link between the European Union and Thailand.

What are the academy's goals for 2011?

To create more national young academies. Right now we have close to 150 members, and we are opening another membership application round this fall. We don't want to have too many: 200 is about right. And of course there's our first annual meeting. We were going to have it in Egypt: we had this really beautiful plan to be in Alexandria. But with the unrest there, we had to change the location to Berlin, so everything has to start from scratch. It has been crazy for the last month or so. But that's what young people can do.



Bruce Alberts is Editor-in-Chief of Science.

EDITORIAL

The Young Academy Movement

I HAVE OFTEN ARGUED ON THIS PAGE THAT SCIENTISTS NEED TO DO MORE THAN SIMPLY ADVANCE their individual research projects. Maintaining excellence in the global scientific enterprise will require constant adjustments to policies and programs. In addition, much more outreach by scientists will be needed to make science better understood by the general public and by governments. Promising progress toward both of these goals comes from a movement that is forging new organizations of young scientists—the “young academies”—around the world. A few weeks ago, a new international organization, the Global Young Academy, held its initial meeting in Berlin to discuss spreading the idea to many more nations (www.globalyoungacademy.org). This effort deserves full support from all of society.

In 2000, a new type of organization, Die Junge Akademie (the Young Academy), was created as a joint venture by two German academies. This Young Academy was described as “an organization intended to harness the resources of both academies in ways that would fertilize research fields with new ideas and bolster career pathways, as well as invigorate older academies by involving the young scientific community in critical policy-related work.”* In 2005, a similar Young Academy was established in the Netherlands. The success of these two experiments has recently inspired six other nations to create their own Young Academies: Egypt, Nigeria, Pakistan, Sudan, Thailand, and Uganda; all nations where the tolerance and rationality inherent to science will be invaluable.

I see this empowerment of young scientists as the next step in a process that began in 1993 in New Delhi, when the national academies of sciences from more than 60 nations came together to develop a coherent scientific position on world population issues in preparation for the major 1994 United Nations International Conference on Population and Development in Cairo. This first-ever meeting of the world’s science academies soon created the InterAcademy Panel (IAP), now a vibrant global network of more than 100 member academies (www.interacademies.net). The IAP functions as a mutual support organization for the existing science academies around the world.

But the empowerment of national science academies with distinguished, well-established members can leave a gap between these influential organizations and the young, dynamic scientists who represent the future in each nation. This is precisely the gap that has been filled by the Young Academies: each a group of fewer than 200 scientists, typically selected by their national science academies to serve in 4-year leadership roles. Through its connection to a prestigious national science academy, each Young Academy is empowered to exert national leadership in advancing science through projects that the young scientists themselves determine. These young scientists can often be more effective than their older peers in interactions with society and with politicians. They also bring new energy to these interactions, with a better gender balance due to the advances that women scientists have made in recent decades.

By bringing together outstanding scientists from many different disciplines, Young Academies catalyze the formation of multidisciplinary scientific collaborations that generate innovative new discoveries. Participation in a Young Academy also strengthens a nation’s scientific enterprise by training its next generation of leaders. The work exposes them to important policy issues while building networks of trusted personal relationships that can bridge disciplines for a lifetime. And by providing a shortcut for outstanding young scientists to exert national leadership, Young Academies can be highly effective in recruiting a nation’s most talented students to scientific careers—a critical issue for the future of every nation.

By fusing the promotion of the larger goals of science with an integration of young scientists into public service, the Young Academy movement is well positioned to drive the creation of the tolerant, rational societies that the world so badly needs.

— Bruce Alberts

10.1126/science.1206680

*V. ter Molen, G. Stock, *Science* 330, 1455 (2010).



Downloaded from www.sciencemag.org on May 2, 2011

CREDIT: ILLUSTRATION: KIM SCHMIDT

<参考資料5>

東日本大震災に対する分科会活動に関する報道

(科学新聞、2011年4月22日、1面、若手アカデミー活動検討分科会副委員長中村の名前を含む)

掲示板アドレス : <http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/wakateacademy/index.html>



中村征樹氏

被災研究者・学生を支援 — 学術会議・若手アカデミー委員会 —

掲示板設け情報発信

東日本大震災で被災した研究者や学生を支援するため、数多くの大学、大学共同利用機関、独立行政法人などが、大学院生や研究員、研究費の受け入れ、論文アクセス権の付与などの支援活動を行っている。ただ、これらの情報は各機関のホームページやコミュニティ内にとどまっているのが現状だ。日本学術会議の若手アカデミー委員会では、これらの情報を効率よく、多くの被災した研究者や学生に届けるための掲示板を設け、取りまとめた情報を発信している。

その中心的役割を果たしているのが、大阪大学大学院教育実践センター准教授の中村征樹さん。3月20、22日、ドイツで開催されたグローバルヤングアカデミー（昨年2月にIAPの支援で設立。26カ国が参加）に参加した。「各国の若手研究者から『何かできることはないだろうか』と問われ、最終的にステートメントをまとめた。アカデミーの参加者の中から、可能な人を募って、日本人研究者の受け入れ窓口を設けるというものです。確かにかいいうことは、やった方がいいけれども、本当に必要な人がそこにアクセスできるのか、という疑問が残りました。特に研究者の受け入れなどの場合、助ける人は少ないと思います。比較的働きやすいのは大学院生や短いスパンで成果を出して次に進む人（ポストドク）です。各機関の受け入れ人数も少ないため、こういう情報が集まらまっているのが大切なと考えました」

帰国後、各機関がホームページ上で発信している研究者や学生の受け入れ情報、研究支援情報などを取りまとめ、ツイッターやホームページで発信し始めたが、より多くの人がアクセスできるように、若手アカデミー委員会の活動として位置づけ、3日から学術会議のホームページに情報を掲載し始めた。12日現在で50機関以上の支援情報が掲載されている。

若手アカデミー委員会ホームページ URL : <http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/wakateacademy/index.html>。